

有馬学著

『日中戦争期における 社会運動の転換』

—農民運動家・田辺納の談話と史料—

評者：横関 至

本書は、1920年代から農民運動に参加した田辺納の「談話」と関連史料、有馬氏による解説から成っている。田辺は、共産党に参加しなかった左派農民運動指導者の代表的存在であり全農全会派の指導的幹部として活動し、戦時下においては中野正剛の東方会に結集し、戦後は公職追放の後に社会党大阪府連の副委員長、委員長をつとめた（田辺納追想録刊行委員会編集・発行『不惜身命—田辺納の素描—』1986年、以下『不惜身命』と略記）。社会党内では西尾末広との人間関係で「右派」に属したと記されている（本書解説、24頁）。共産党に批判的であったが、社会党と共産党の共闘を支持する立場にたっていた。こうした経歴の持主であったが故に、「左派」農民運動の実態を探る上でも、戦前・戦中・戦後の社会運動について検討する上でも、社会党研究にとっても、本書は貴重な史料を提供している。「解説」では、戦時期の社会運動についての著者の有馬氏の見解が提示されている。

著者の有馬氏は、1945年7月生まれで、東京大学の学生・大学院生として伊藤隆氏に師事し、1976年より九州大学で教鞭をとられ、東方会や九州での水平社の活動を対象として戦時下の分析を精力的に行ってこられた。この十数

年間、『日本の近代（4）「国際化」の中の帝国日本』（中央公論新社、1999年）や『昭和の歴史（23）帝国の昭和』（講談社、2002年）を刊行されている。本書は退官記念の一環として出版されたものである（4頁）。

まず、戦時期の社会運動についての有馬氏の見解を紹介しておこう。有馬氏は、「日本の社会運動は、直接的に行使する社会的圧力より以上に、独自の意味合いを帯びた存在であったと考えられる」（3頁）とされ、「総体としてとらえるならば、戦前・戦中期における日本の社会運動の影響力は限定的なものであった」（3頁）と断定されている。労働立法も土地立法も成立せず、組合は「政治党派のイデオロギー対立のもとで離合集散を繰り返す」（3頁）、組織率は低く、無産政党は「衆議院における議席数は1936（昭和11）年の総選挙までは無視しうる程度のものでしかなかった」（3頁）。「しかし、他方で戦前・戦中期の日本社会運動はそのような実体以上の何ものかであったとも言える」（3頁）として、その事例として以下の点を指摘される。「1938年の近衛新党運動や1940年の新体制運動において、社会大衆党はなぜそれらの運動の、少なくとも主体の1つを構成することができたのだろうか」（4頁）、「それのみならず」、「彼らは翼賛会というまぎれもない国家機構の一部に参入を果たしたのである」（4頁）と。このことを次のように位置づけておられる。「このことは、みずから発言することがきわめて少ないが故に計量し得ない大衆という存在の幻影が、戦前・戦中の政治において無視できない意味をもつこと、社会運動という存在はそのような意味を表示する、少なくとも象徴ではあり得たことを示しているのではないか」（4頁）。「そのような発想から、筆者は昭和戦前・戦中期の政治を構造的に解明するための迂回路として、社会運動への関心を持ち続けてき

た」(4頁)。こうした関心の下に、次のように本書を位置づけておられる。「とりわけ筆者は、1938年の全農分裂問題の中に日中戦争期における社会運動が包含する、したがって戦時期日本の政治構造を解明する上で重要な契機が示されていると考えている。本書に収録する田辺納のインタビューと関係史料は、それらを考察する上で重要な手がかりとなるであろう」(5頁)と。

著者のこうした見解について幾つかの疑問を提起せざるをえない。1つは、著者の分析の大前提となっている「計量し得ない大衆という存在の幻影」(4頁)という把握についてである。普通選挙の実施は「大衆」の政治参加を拡大し、その意思を「計量」することを可能とした。それ故、普通選挙が実施された後の時期については、「計量し得ない大衆という存在」とみなすことはできない。各種の選挙結果は、その時点での「大衆という存在」の政治的意思の表明であった。普通選挙実施後の政治の特徴は、「大衆という存在」が「幻影」としてではなく実体をともなったものとして政治上に登場してきたところにあった。次に、「大衆」の政治参加が既成政党の変化をもたらす政党政治のあり方を大きく変化させたことが視野の外に置かれている。既成政党は普通選挙実施への対策を講じ、民衆掌握の方策を模索し、社会政策を展開しようとした。その際に、既成政党の政策的相違は明瞭になった。3つめとして、無産政党については「衆議院における議席数は1936(昭和11)年の総選挙までは無視しうる程度のものでしかなかった」(3頁)とされている。しかし、無産政党が議会運営上でキャスティングボートを得る場合もあり「無視しうる程度」とはいえなかった。以上の点については、拙著『近代農民運動と政党政治』(御茶の水書房、1999年)を参照されたい。

では、本書の問題点と要望を記しておこう。まず、本書の幾つかの問題点である。1つめは、前掲『不惜身命』との関係である。田辺の談話の文書化は初出ではなく、前掲『不惜身命』にすでに収録されているものを修正、加筆したものである。この点について、本書の「まえがき」では言及されておらず、13頁で触れているのみである。「まえがき」で述べておくべき事柄であったろう。さらには、何が新しく、どの点が詳しくなったのかを解説すべきであったろう。たとえば、本書収録の談話と比較すると、前掲『不惜身命』には明記されていなかった人名が記されている。その説明を付けるべきであったろう。2つめは、「田辺納氏との対話」(前掲『不惜身命』164-167頁)は、本書に収録されていない。そこでの重要な指摘は、『「自分は日本が戦争に勝つと思っていた。そう思ったから東方会運動に積極的に関わったのだ。今になってそのことを否定しようとも隠そうとも思わない。』』という意味のことを明言された」(同上、166頁)という点であった。しかし、この発言は前掲『不惜身命』所収の談話には載せられていないし、本書にも収められていない。存在するものならば、是非とも本書に収録すべきであったろう。3つめは、「社会運動の転換」という表題に関係する問題であるが、何から何に「転換」したのかについての見解は明示されていない。これこそ、読者が知りたかったものである。また、「まえがき」において「1938年の全農分裂問題の中に日中戦争期における社会運動が包含する、したがって戦時期日本の政治構造を解明する上で重要な契機が示されていると考えている」(5頁)という指摘がなされているが、「重要な契機」とは具体的にどのようなものかについても示されていない。

次に、本書への幾つかの要望を記しておこう。1つは、東方会について有馬氏の研究(「東方

会の組織と政策—社会大衆党との合同問題の周辺—」, 九州大学文学部『史淵』114輯, 1977年および「戦争期の東方会」『史淵』118輯, 1981年)を、「社会運動の転換」を取り扱った本書に収録していただきかった。左派農民運動指導者が中野正剛の東方会に結集したのは何故かという問題を解明していく上でも、戦後との関わりを見ていく上でも、不可欠であったのではなからうか。2つめは、戦時下と戦後との関連について、稲村隆一を事例として重要な示唆をされている。「稲村の書簡は全体として、アジア主義的な心情の戦前からの連続性をうかがわせるものである。ここにあらわれたような、戦後革新勢力におけるナショナリズムの要素については、これまであまり検討されていないが、戦後政治を考える上で重要な問題であろう」(25頁)と。この問題についての著者の見解を開示してほしかった。

最後に、本書を踏まえて今後議論すべきと著者が考えたことを3点指摘しておこう。その1つは、田辺納の地域での「世話役活動」をどのように評価すべきかという問題である。田辺は一貫して地域での「世話役活動」を展開した。「左派」農民運動の全会派での活動においても、中野正剛の東方会での活動においても、岸和田市議としても、戦後においても。こうした人物の歴史的評価はいかにあるべきか、今後の大きな検討課題である。この点については、前掲『不惜身命』所収の椿繁夫の回想が注目される。東方会での活動について、椿繁夫は「当時の私達の立場からは右翼への転向であり、裏切りであると糾弾していたものである。しかし彼は、いかなる出所進退のときにも暗さはみじんもなかった」(前掲『不惜身命』198頁)、「田辺君の思想遍歴は尊敬すべきものではなかったが、晩年に至るまで泉州の若い活動家たちからはオヤジさんと慕われ、グループの中心的地位を失

わず尊敬されていた。それは地方公共のためにつくし、若い仲間の面倒見もよかったためである」(同上)と評している。2つめは、共産党に参加しなかった左派農民運動指導者のなかでの、他者との比較の必要性である。まず、日本農民連盟には入ったが東方会の活動には参加しなかった人物との比較が必要となろう(本書, 99頁参照)。富山県の矢後嘉蔵は日本農民連盟には入ったが東方会の活動には参加せず、戦後は衆議院議員となった(拙稿「書評 岩本由輝 解題・北山郁子編『不敗の農民運動家矢後嘉蔵』刀水書房, 2008年」『大原社会問題研究所雑誌』608号, 2009年6月参照)。田辺と矢後は、広い意味での「左翼」の結集の要となり、共産党員の面倒を見た点では共通している。田辺は東方会に参加したため公職追放となり、追放解除後も衆議院議員にはならなかった。この両者の比較は、今後の課題の1つとなろう。次に、田辺と同じく、非共産党員の左派農民運動家で東方会に参加した大阪府出身の活動家羽原正一との比較も必要となろう。羽原と田辺は全会派での活動や総本部復帰運動で同席することもあった(拙稿「全農全会派の解体」、『大原社会問題研究所雑誌』625号, 2010年11月)。しかし、羽原の回想記(『農民解放の先駆者たち』文理閣, 1986年)には、口絵写真(1964年の杉山元治郎委員長追悼会の写真では隣り合わせで写っている)を除いて、田辺の名前はほとんどでてこないし、本書の田辺の談話には羽原の名前はでてこない。何故お互いに言及することが少なかったのかは、今後の検討課題であろう。3つめは、共産党の活動家とのつきあいをどのように評価するかである。有馬氏は「田辺には独特の共産主義観があったようである。『談話』の内容を信ずる限り、右派社会党に属した戦後においても、反日本共産党ではあっても理念的に反共になったわけではなさそうであり」(15

頁)と把握しておられる。田辺と共産党の関係の評価は、今後の課題であろう。この点に関連して、前掲『不惜身命』には注目すべき回想が掲載されている。「日本共産党中央委員会顧問」の戸松喜蔵は、田辺の社会党大阪府副委員長・委員長としての活動について次のように回想している。「田辺さんが社会党府本部の副委員長・委員長をされていた時期は、社共革新統一のよき時代で、お互いに心を通じ合いながら、気持ちよくお付き合いをさせていただきました」(前掲『不惜身命』202頁)。こうした公的立場での共産党との関係のみでなく、私的関係においても田辺は共産党員を匿い、援助した。戸松喜蔵の回想によれば、山田六左衛門や岩瀬潔、岡映などの「共産党関係の活動家たち」が「田辺さんから物心両面の援助を受けていることが明らかになりました。私はおそまきながら、田辺さんに深く感謝いたしたいと存じます」

(同上)。さらに、「元日本共産党北海道委員会責任者」の吉田四郎は、「狭い党派性にこだわらない、左翼運動全体を包み込まれるその情熱と愛情は、戦前に徳田球一さんを泊めたり、戦後も知り合いの左翼の若者をその翼の下にかくまって警察の手入れを受けそうになったりのお話のなかでもうかがわれたが、とりわけ山田六左衛門さんには特別の愛情をもっておられた」(同上, 310頁)と回想している。

幾つかの疑問と要望を述べてきたが、本書が戦時下・戦後の研究のための貴重な書籍であることは間違いのないところである。
(有馬学著『日中戦争期における社会運動の転換—農民運動家・田辺納の談話と史料』海鳥社, 2009年3月刊, 185頁, 定価2000円+税)
(よこぞき・いたる
法政大学大原社会問題研究所兼任研究員)

●新自由主義という歴史的概念に依拠した炭鉱争議の分析
早川征一郎著—A5判・三四〇頁・六五〇円(税込)

イギリスの炭鉱争議 (一九八四〜八五年)
イギリスのサッチャー政権下でおきたイギリス炭鉱争議は新自由主義諸政策の成否をかけた歴史的なすさまじい労働激突であったことを描く。

●第二版では女性労働力率の最新動向を付加する
青柳和身著—A5判・五六〇頁・六九三〇円(税込)

フェミニズムと経済学《第二版》
——ボウヴォワールの視点からの「資本論」再検討
フェミニズムの古典としての「第二の性」とマルクスの『資本論』を比較しつつ性・生殖史と近現代の人口史資料による「資本論」の再検討。

●「心地よい生」を創造する道、すなわち希望社会への道を探る
鈴木七美・藤原久仁子・岩佐光広編著—A5判・二〇〇頁・二五〇〇円(税込)

高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働
高齢者の「幸福」という観点から、地域の歴史と特性を生かした調整や工夫の協働作業の経過をフィールドワークに基づき提示する。

●越境によるアイデンティティ変容と学校文化適応を分析
趙衛国著—A5判・二九〇頁・六〇九〇円(税込)

中国系ユカマイ高校生との異文化適応
異文化間移行を経験した高校生の発達と、学校や家庭、地域社会が担う役割を、文化—歴史的活動理論の枠組から異文化適応の実態を解明する。

●ネットワーク世界政府の可能性を探る情報化社会の所有論
高橋一行著—A5判・二二〇頁・三三六〇円(税込)

所有論
資本主義社会における貨幣の変動と国家の持つ権力の偏りから生じる暴落や戦争を防ぐ複合貨幣の導入と、それを管轄する世界政府を展望。

●生活のなかの持続可能性!!
加藤尚武者(神奈川大学評論ブックレット29)——一〇五〇円(税込)

入門 環境倫理学——持続可能性の設計
環境倫理学という畑を掘り返して土の中に埋もれている論点の筋目を明らかにし、百年先の世界について具体的なイメージを持つ重要性を語る。

御茶の水書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20 電話03(5684)0751
ホームページ <http://www.ochanomizushobo.co.jp/>

69